

<p>6. 事業内容</p>	<p>第2期となる本事業では、CMA Cが不発弾の回収処理を主体とする3名編成のEOD (Explosive Ordnance Disposal) チームから、汚染地域の調査 (BSL:Base Line Survey) を実施する対象地のクリアランス及び地域住民への危険回避を実施する5名編成のERWI (Explosive Remnants of War Intervention) チームに編成替えしたため、新たな科目についての能力の向上が必要となった。</p> <p>これにより、2014年度に実施してきたチームリーダーの野外マネジメント能力の向上に加え、サーベイ能力、地域マップ作成能力、地域住民に対する危険回避教育の能力向上についての教育を実施する。なお、右教育の実施にあたり、CMA Cの教官が得意な科目があるので、CMA Cの教官も活用する。また、ERWチームの編成替えは2015年からであるので、教育実習時の運用要領も含めて指導していく。探査については、2014年の調査経験から、費用対効果上得策でない結論づけたので、ERWIチームに対して必要な金属探知を含む探査実施要領の教育を行うとともに、探査結果の記録ができるようERW探知機の改造を実施していく。</p> <p>(1) ERWIチームの処理能力向上</p> <p>(ア) 2014年の計画ではEOD教育を5回実施する予定であったが、科目が追加となったこと、オペレーションが特定地域で最低1月必要となったこと、並びに2014年の教育において教育と教育の間に時間がなく、タイトであったことを踏まえ、今期事業では当初予定の8週間教育を11週間教育に延長する。</p> <p>学科6週間程度、実習3週間を基準とし、年3回の教育を実施する。</p> <p>(イ) 新たな運用要領に基づき、住民への危険回避教育要領及び地域探査要領についての時間を多く配当する。</p> <p>(ウ) 教育対象チームが決まった後、当該チームをCMA C教育センター (Technical Institute of Mine Clearance: 通称T/C) に集合させ、近隣地域においてERWの回収・処理を実践させ、その処理過程において既履修した教育の知識や技術を適用できているか、またSOP (Standard Operation Procedures) (作業手順) に沿って処理を実施しているか等について、専門家がチェックリストにより把握、測定する能力把握調査により被教育者の教育前能力を把握する。</p> <p>(2) 教官要員の能力向上</p> <p>(ア) CMA C教官担任科目の教育実施における教育の準備要領及び教育終了後の成果の蓄積要領に対して指導 (被教育者のアンケートによる分析、授業視認結果による) を行う。</p> <p>(イ) CMA C教官の教育実施中活動に視認を行い、教育要領をチェックする。</p> <p>(3) ERW探知機の改造検討</p> <p>面的な地域のクリアランスにおいては探査結果についてスティック等を挿して目印としているが、ERWの探知結果ができればより効率的であることから、探査結果を記録できるような機材の改善ができないか検討する。(簡易デジタル記録計の装着)</p>
----------------	--

	<p>(4) 2014年度の被教育者のフォローアップ 教育成果の確認及び教育成果の実践についてのフォローアップのため、CMACと一緒に年2回のモニタリングを実施する。</p>
<p>7. これまでの成果、課題・問題点、対応策など</p>	<p>(1) これまでの事業の成果</p> <p>ア 教育準備</p> <p>(ア) 教育に必要な教育資料及び一部の教材を2014年3月に完成させ、CMACの認可を受けた。現在、これらの資料を活用しながら教育を実施している。また、被教育者の教育後の自習にも活用されている。</p> <p>作成した資料は、教育資料64冊、教育計画（レッスンプラン）66ページ、教官教育準備ガイド以下17冊であり、これらをクメール語に翻訳し、所要の部数を印刷した。</p> <p>(イ) 教育に向けての事前調査ワーキングGP活動を実施するとともに教育要領等についてのワークショップを開催した。</p> <p>(ウ) JMAS専門家によって、教育の展示を担う指導チームに対する教育展示要領の実習を10回（34時間程度）行い教育間に問題なく展示が実施できた。</p> <p>イ EODチームの能力向上</p> <p>(ア) トレーニングチームの能力事前評価をJMAS専門家等6名、CMC3名で8日間実施し、弱点を把握し、その後の教育に反映した。またアンケートの実施によりEODチーム全員からメンバー教育に対する要望も把握した。</p> <p>(イ) 1回目の教育を4月から6月までの間、2個チームに対して教育を実施した。教育実施する前では、チームリーダーとチームメンバーそれぞれ素養試験における得点率が52%、37%であった。教育後の最終試験では、それぞれの得点率が91%、81%となった。また、教育実習間の行動をチェックリストにより確認したが、チームリーダー80%、チームメンバー75%と目標能力に達していることを確認した。</p> <p>ウ 磁気探査有効性調査の実施</p> <p>T/C内に設置してあるテストレーンにおいて約10日間、日本から持ち込んだ機材及びCMACが現在使用している機材の比較等を行った。カンボジア独特の鉄分の多い土壌においても磁気探知機は有効であることを確認したが、クラスター弾等100mm以下の小口径の埋設弾の探査能力は、CMACが探査の信頼性を保証する目安の深さ40cm程度では磁気探知機も金属探知機も差はないことがわかった。また、深さ2m程度に埋設している爆弾等の探査には磁気探査が有効であることも確認した。</p> <p>(2) これまでの事業を通じての課題・問題点及び今後の対策</p> <p>ア 事前能力把握期において実際の不発弾識別地域に入ることができず、リーダーの指示や識別が適切かどうかについて十分把握できなかった。この対策として、確実に被教育者の能力を把握するため、教育開始の1週間程度前にT/Cに集合させて、JMASの計画に沿って能力の把握</p>

	<p>を実施する。</p> <p>イ 教育と次の教育の期間に間隔がなく、教育終了後に教育の反省事項や教育計画の手直し、次期教育への反映等次の教育準備が十分にできなかった。</p> <p>この対策として、当初の計画では、2015教育年度は教育回数が5回と設定したが、第2期事業の教育回数を3回に変更し、教育期間を8週間から11週間に延長する。</p>
<p>8. 期待される成果と成果を測る指標</p>	<p>(1) ERWIチームの処理能力向上</p> <p>ア ERWIチームへの教育成果を測る指標</p> <ul style="list-style-type: none"> ● T/C教育終了時の最終テストで、全員が70点以上得点を取ること。 ● 教育実習におけるチェックでマルチ能力の向上を把握する。 (注：マルチ能力＝不発弾だけでなく地雷やクラスター弾の処理もできる能力、及び処理と同時に地雷・不発弾汚染地域の調査する能力) ● 後半の教育実習間、チェックリスト（事後作成）の項目で70%以上を獲得すること。（モニタリング時に確認） <p>イ 住民へのサービス意識の向上を評価する指標</p> <ul style="list-style-type: none"> ● チームリーダーが住民への危険回避教育が実施できるようになる。 ● リーダーの企画・計画のもと、チーム員が実習時に危険回避教育を実施ができる。 <p>(2) 教官能力の向上</p> <p>ア ERW教官の意識改善及び質的能力の向上を評価する指標</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 教育視察におけるチェックリストにおいて70%以上の項目で良好と判断されること。 ● 教育後、被教育者アンケートにおいて被教育者の70%以上が教育法等の重要性及び教育内容の重要性を自覚することができること。 <p>イ 自主的な教育研修実施を評価する指標</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 教育予行評価チェックリストで70点以上の得点を取ること。 ● CMA C教官が教育後、教育成果結果を記録すること。 ● 教育後の検討会にて自らの教育を評価すること。 <p>(3) 裨益人口</p> <p>直接裨益人員：ERW要員30名（リーダー6名（副含む）、チーム員34名）、ERW教官6名</p> <p>間接裨益人員：被教育チームの活動州等の汚染人口 約240000人</p>